

動作法療育キャンプにおける障害児の兄弟姉妹に関する検討

— サポーターの役割を通じた変容 —

河野 文光

岐阜聖徳学園大学教育学部

The siblings of the handicapped children who participated in the
Dosa-hou training camp:
Their development through the role of supporter

Bunko KONO

Abstract

This paper focuses on the siblings of special needs children. In recent years, more and more books and theses about support for the siblings of special needs children have been written and published in Japan. However, most of them are literature studies. There are still very few practical studies. This paper is based on the actual practice in the “training camp for special needs children and their parents” implementing the Clinical Dosa-law which was independently developed in Japan. Siblings accompanying a special needs child participated in the training camp as the supporter of the child. In the course of taking this role, they gained a better understanding of other special needs children through communication with other children’s siblings. Changes in the siblings are studied by examining their experience notes and the results of the questionnaire filled out by the parents of siblings of the special needs children who joined the camp.

Key Words : siblings of special needs children, clinical Dosa-law, training camp, supporter role

I. 緒言

本論は、筆者が35年間携わってきたA県M地域での動作法療育キャンプ^{註1)}における障害児者の兄弟姉妹に焦点を当てている。今まで付き添いでキャンプに参加してきた兄弟姉妹が、キャンプでのサポーターの役割を担うことにより、従来までとは違ってどのように変容してきたかを検討する。

他県から動作法の療育キャンプに参加した研修者や障害児者の親たちから「ここは、中学生が手伝ってくれるのですね」「新鮮でした」という感想を聞いてはいたが、取り分けて注目もしていなかった。ところが、所属している研究会から会報の原稿依頼をされた際、「新鮮」と形容された彼ら（中学生の兄弟姉妹）に焦点を当ててみるのも良いのではないかと思ひ、執筆を彼らに託した。そのことが契機となって、彼らとその母親たちに現状をどのように考えているのか、またキャンプでの人手不足を逆手にとって、兄弟姉妹の積極的登用を考えても良いのではないかと考え、本検討に至っている。

遠矢（2003）¹⁾は、その「訳者まえがき」で、自閉症という障害を抱えている子どもたちと最も多くの時間を過ごし、彼らの発達に最も大きな貢献をしている家族、取り分け母親や兄弟姉妹の心の健康や、兄弟姉妹の不安や悲しみに目を向ける必要性を記している。本邦では、障害児者の兄弟姉妹への支援に関する文献（柳澤, 2007²⁾ ; 林, 2008¹⁾）は最近になって幾つか出てきている。ただし、その多くは海外での兄弟姉妹に関する報告に端を発した文献研究（大瀧, 2012⁸⁾ ; 竜野他, 2016¹⁰⁾）または調査研究（永田他, 2016⁵⁾ ; 武田・熊谷, 2015⁹⁾）が主で、支援の実践的研究は少ない。本論も一部分、母親と障害児の兄弟姉妹へのアンケート調査結果に依拠するが、その根底に臨床動作法を用いた障害児者援助の療育

キャンプという実践の場での兄弟姉妹への支援に焦点を当てている。

もとより障害種別や年齢によって、また同一の障害名でもその障害の程度が異なれば障害児者自身の対人関係能力にも自ずと差異は生ずる。似通った障害の程度であっても障害児者の成育歴や家族および彼らを取り巻く施設・学校及び地域等の支援体制の差異からも同様のことが言える。したがって文献研究における示唆は、あくまでも「一般的には」という形容詞は外せない。

一方、本事例の舞台は一週間という限られた期間と限られた訓練回数および80数名という大集団での療育キャンプであり、目的も方法も「動作法の研修」という同一の価値観を抱いた者同士の学習の場である。しかも障害児者は、親や兄弟姉妹も同伴での参加という、いわば家族の形態を一部取り入れたまま、しかも他の障害児者の家族や療育に携わる専門家および教育や療育の当事者（学校の教師・施設職員・臨床心理士等）・教育や療育に将来携わろうとする学生たちの集団である。

療育キャンプを始めた当初は、障害児者の動作や行動上の問題・困難を克服することが主目的であったが、回を重ねるにしたがって、ふだん障害児者に携わっている先生や指導員および将来携わる意志のある学生たちの訓練技法の研鑽、さらには家庭で療育に携わる障害児者の親への療育の理解と訓練技法の習得という目的が加わってきた。この流れは実践している療育活動においては必然的な帰結ではある。ただ俎上に上がる療育の研究課題は、この流れ同様に技法や理論、障害児者の変容、療育体制の改善、親の関わり等々で、なかなか障害児者の兄弟姉妹の問題は脇役であったことは否めない。筆者自身も研究主眼は事例研究や障害児者への効果的な技法の開発及び療育方法の構造的・質的検討という路線は従前のこととして囚われていた観はある。以上の反省から、ノーマライゼーション思潮である、障害者で在る無しに関わらず皆が共に幸福を追求する権利を云々するとき、脇役は時には主役を演じてこそ療育集団という有機的構造は活性化されていくのではないかと、との着想の試みを検討しながら兄弟姉妹への対応を模索する端緒としたい。

II. 研究の方法

1. 研究の方法

ここでは、X年-2年とX年-1年の2年間を通した、M地域の動作法療育キャンプを対象とする。キャンプ中の観察に加え、サブトレーナーを担当した障害児者の兄弟姉妹である中学生9名及びその母親7名（1名は無回答）に対して、兄弟姉妹関係、障害児者と兄弟姉妹とのトラブルやけんか、親からの障害名や障害内容の説明の有無、実際の対応で困っているか、将来への不安や構想等々17項目に亘ってのアンケート調査を実施した中から、本論に関係する療育キャンプに絞った項目を検討する。

併せて、投稿された2名の兄弟姉妹の手記の内容を検討し、動作法療育キャンプが障害児者の兄弟姉妹にどのような変容をもたらしたのか、またその変容をもたらす要因としての療育キャンプ自体の構造的側面を参加者相互の関係性という観点から考察する。

2. 兄弟姉妹へのアンケート【抜粋】

設問1. キャンプで、あなたがサポーター（サブトレーナーとか風呂介助など）としての役割を担うことについて、下記の中から当てはまるものを○でかこんでください。

（ 賛成 反対 わからない ）

また、その理由を下記に書いてください。

設問2. 今までに何回サポーターをしましたか、その回数を記入してください。

（ 回 ・ していない ）

設問3. サポーターをしてどうでしたか。

（ 良かった 嫌だった あまり考えたことはない ）

設問4. サポーターをして良かったことを、具体的に下記に書いてください。

設問5. サポーターをして嫌だったことを具体的に下記に書いてください。

設問6. サポーターをする上での希望があれば、具体的に下記に書いてください。

3. 母親へのアンケート【抜粋】

設問1. キャンプで、兄弟姉妹がサポーターとしての役割を担うことについて、下記の中から当てはまるものを○でかこんでください。

(賛成 反対 わからない)

また、その理由を下記に 下記に書いてください。

(※以下、兄弟姉妹へのアンケートと同意文面のため省略)

4. 手記

引用文献(喜島, 2014⁴⁾; 中垣, 2015⁶⁾)による。

Ⅲ. 結果

1. 動作法における療育キャンプの構造とサポーター(兄弟姉妹)の役割

全国で実施されている動作法による訓練キャンプは、名称も継続年数も異なり、規模も異なるが、一般的には、事前研修(通常はキャンプ前日)を含めて7日間を単位としている。期日は、参加し易さを考慮して、学校が休みとなる夏休みに集中しているが、春休みや年末に行っているところもある。本論で取り上げたキャンプ参加者は、被訓練者(トレーニー、以下Tnと略)である障害児者20名(脳性まひを主とする肢体不自由児者、自閉症児者、ダウン症児者等々)や軽度の発達障害絡みの不登校児者など様々である。それに障害児者の親や祖父母、付き添う兄弟姉妹、トレーナー(研修者である訓練者、Trと略:20名)として学校の教員や施設職員および臨床心理士などであるが、スーパーバイザー(有資格者である講師、以下SVと略:4名)やサブTr(TrやSVの指示でトレーニーと関わりTrの補助をする)若干名、スタッフ若干名を含めると総勢80数名となる。

この人数で寝食を共にするため、日程や活動する内容によって部屋・場所の移動やその介助などが各自の役割と絡めて、訓練場面以外でも決められており、多くの方とのコミュニケーションを図らないと成り立たない構造になっている。取り分け、メインとなるキャンプの目的を①Tnの訓練効果、②Trの訓練技術や動作法理解の向上、および③親の訓練技術の向上や親同士の親睦として、Tn-親-Trの三つ巴の有機的な繋がりを持った研修会となっている。

訓練場面の構造は、TnとTrが一組となって一週間を共にする。その組が4~5組で一班を構成し、全体では4~5班編成となり、各班にSVと若干名のサブTrが入る。本論で取り上げるサポーターは、このサブTrに準じた役割を担い、大学生のサブTrと同様に各班に配属されて大学生のサブTrと一緒に行動する役割を担う。

日程は、キャンプ前日の午後からTr研修が始まり、初日の午前中までが事前研修と位置付けている。Tnと親や付き添いは初日の昼食から合流し、その後はインテーク(予診)として、SVが見立てたTnの訓練課題をTrが確認しながら、同席している親からの訓練目標等の希望を加味して訓練セッション(1回は60分)をTnとTrが行っていく。2日目からの日程は、朝食後から朝の会が始まり、一日3回の訓練が入り、その間にTr研修、親研修、保育、集団療法が入る。夕食後は順番に入浴を済ませ、Tnは親と共に自由時間となり就寝を含めて親にTnの介助のバトンを渡す。Trは、入浴介助が終わると各自の訓練記録を記し、1時間の班別ミーティングに引き続いて同じく1時間の全体ミーティングで一日が終了となるが、係によっては翌日の準備を済ませてからの就寝となる。

上記の日程中で、サブTrは訓練場面ではTrの援助者として、SVやTrからの指示の下にTnの姿勢保持を介助したり、Trと一緒にTnの動作遂行を励ましたりする。食事場面では、親の摂食介助場面を見て、指示に従って摂食の手伝いをし、朝の会や集団療法では、係の一人として役割を担う。入浴場面や排せつ場面では、親やTrの指示で、共同で介助の手助けを行う。つまり起床から就寝までTrと共に、班や全体のTnの援助者(サポート役)としての役割を任される。

当キャンプでは、各班毎に1~2名のサブTr(大学生)が配置されているが、それに加えて兄弟姉妹のサポーターをサブTrとして、またその役割をキャンプ参加者全員に紹介し、了解の上で行った。

したがって、付き添ってきた兄弟姉妹は希望することによって、サポーターとして大学生のサブ Tr と同様の役割が分担される。それは、班や全体の場において、一つの役割分担として一緒に行動することになり、SV や Tr の指示を受けて行う行動と共に、場面に応じた自発的な行動も行うことを意味する。指標となる基準は、前掲した三つ巴の目標達成のために、周囲の人たちとコミュニケーションをとりながら自発的・協調的・共同的な支援行動を通して補助的補足的行為を、安全かつ適時的に行うということになる。これが療育キャンプでのサポーターに課せられた役割となっている。従前のようにサポーターの役割がなかった時は、一日 3 回の訓練時間や研修や保育時間は訓練場面や研修・保育には参加せず、自分の部屋で宿題をしたりゲームで遊んだりしていたのであるから、制約される時間帯が増えると共に自発的に動くことや共同して行う行動がより多く要求された。

サポーター同士が同じ班になることは少ないため、当初は班内での雑談相手も限られて緊張気味であったが、徐々に雰囲気慣れて、自分から質問したり Tn の様子を話したりし、キャンプの後半には集団療法や入浴介助では積極的に自分から行動する場面が多々見られた。

2. 兄弟姉妹のアンケート結果（抜粋）

期間内に参加した障害児者の兄弟姉妹のうち、9 名の中学生（内 2 名は同家族）に選択式・記述式混合のアンケート調査を実施し、下記のとおりのお得た。

- 1) キャンプでサポーターとしての役割を担うことは：賛成 8・わからない 1：その理由；周囲のトレーナーの先生から様々なことを教えてもらえる・来ているだけではつまらないから・役に立つことができるから・サポーターをやっている人が多いから私もやりたい
- 2) サポーターを何回したか：3 回以上 1 名・2 回 5 名・1 回 2 名・していない 1 名
- 3) サポーターをして：良かった 6 名・あまり考えたことはない 2 名・無記名 1 名
- 4) サポーターをして良かったことは：様々な人と関わった・兄弟だけでなく他の障害児者とも関わりが持てた・「助かりました」と言われた・先生たちに感謝してもらえた・成功した時や上手くいった時、ほめたりすると笑って嬉しそうにする・普段と違う兄を見ることが出来た・楽しかった・どんな活動をしているかがわかった・いろいろ学べた
- 5) サポーターとして嫌だったこと：訓練中は何をしても良いか分からなかった；2 名・特になし；6 名・無記名；1 名
- 6) サポーターをする上での希望：訓練中トレーニーはトレーナーにばかり頼り、私たちにぜんぜん頼ってくれない時に気まずい、他のことでももう少しサポーターに頼って欲しい 1 名・特になし 6 名・無記名 1 名

3. 母親に対するアンケート結果（抜粋）

キャンプに参加した母親の内、障害児者の兄弟姉妹同伴の 7 名（内 2 名は兄弟姉妹が 2 名）に選択式・記述式混合のアンケート調査を実施し、以下の回答を得た。

- 1) 兄弟がサポーターの役割を担うこと：賛成 6 名、未記入 1 名 その理由；自分が障害のある兄弟とどう接したら良いかが分かって来ると思うから
- 2) サポーターを何回したか：3 回以上 1 名・2 回 5 名（2 名分回答 1 名）・1 回 2 名（2 名分回答 1 名）・していない 1 名
- 3) 役割をした兄弟の反応は：やり切った達成感があったと思う・嫌々と言いながら、少ししっかりしている姿を見れた・訓練中は退屈のようだ・お風呂介助は頑張った・有難うと言われるほど本人はやっていないと思っている・人の役に立っているという思いで嬉しそうだ・戸惑いもあったがやってみて良かったと思っているようだ・ただキャンプに付いて行くだけではなく役に立っていると思っていて楽しそう（複数回答 1 名）
- 4) 役割をしたことのメリット：障害児に対する見方が明らかに変わった・ダラダラしなくなった・障害児のやっている訓練や先生方の接し方が見られる・子供なりにしっかりしてきたとキャンプ後に感じる・親がそばにいない時の障害児の兄弟の様子を見たことや大人の真剣さを見たこと・なぜキャンプや訓練会をしているのかが身をもって少しずつ感じている様子（複数回答 2 名）
- 5) 役割をしたことのデメリット：特になし 5 名・朝の訓練室の掃除から始まって、お風呂介助までずっと拘束され、自由な時間が少なくストレスが溜まるようだ 1 名・無回答 1 名

- 6) 役割をする上での配慮事項等の希望：訓練時間中に特に指示もなく、ずっとそば居るのが辛いようだ。自分で気を利かせて動けばよいがそれが出来ないで、具体的な指示が欲しい・班ごとに分かれてしまうので、同世代の他の兄弟たちとの交流が持てる時間を作ってあげたい（それが一番の楽しみのようだ）・いろいろなチャレンジや経験を一杯させてあげたい・指示はマネージャーや班のSVから具体的に欲しい・困った時の相談者をあらかじめ決めておいて欲しい・無回答1名

4. 事例

(1) 事例1

喜島 (2014)⁴⁾ は当時、中学2年で、小4の障害児の兄である。「僕の弟は自閉症です。会話はうまく出来ず、気持ちも伝えられません。混乱すると泣いたり、怒ったり、自分の頭をゴンゴンしたりします。外出先や道端でも構わず怒り出すので、困ります。でも、小さい頃から皆には『ピカちゃん』と呼ばれて可愛がられています」と弟を紹介している。弟が2回目となるキャンプ(X-3年)に付き添った時に、初めて参加し、特にやることもないので宿題やゲームをして時間を潰そうと考えたりしていた。スタッフから、やることのないなら入浴介助の着替えを手伝ってほしいと頼まれて、不安もあったが自分もみんなの役に立ちたいと思い、Trの先生方にやり方や接し方を教えてもらい、何とかやりきることができた。それをきっかけに、Trの先生たちとも話が出来るようになった。

自身が2回目となる翌年は、最初からサポーターを志願し、サブTrとしてサポーターを引き受けた。訓練場面や集団療法の手伝い、および摂食介助に加わった。「訓練の出来ない状態の自閉症のトレーニーさんも最終日には時間内はずっと訓練に集中し、先生とのやりとりをしていたのは印象的でした」とか、同じ班で直接訓練時間に関わった脳性まひ者のTnがあぐら坐位がとれず辛そうに見えたが、弱音を吐かずに3日目には自分であぐら坐位が出来るようになったのを目の当たりにして「前を向いて頑張ればその分良いことがあるんだよ」と言うそのTnの姿に感動している。

また、班別のミーティングや全体ミーティングにも参加し、先生方や大学生の真剣な討論を聞きながら、何とかTnの状態の改善を図ろうとする熱意に心を動かされている。彼に影響を与えたもう一人は、先のTnを担当したTr(特別支援学校教員)で、懇切丁寧に関わってくれて、しかもユーモアもあり、人との関係作りの大切さを学んだという。

弟の班とは別の班の所属なので、時々様子を見る程度であったが弟も順調に訓練が出来ているようで、そうした弟の状態に安心してのことか、垣間見る母も楽しそうにしている。自分自身も嬉しくなると表現している。「弟がきっかけで参加したキャンプで、・・たくさんの人達と出会って、たくさん学んで僕にとってすごく大切な時間を過ごすことが出来ました。・・弟のような人の訓練のお手伝いをしながら、大切な事を知ることが出来る動作法やこのキャンプは、僕にとって今もこれからも大切な場所にならない」と結んでいる。

(2) 事例2

当時、高等部2年生の自閉症の兄がいる妹の中垣(2015)⁶⁾は、数年前からキャンプには参加していたが、中3になる年にサブTrとして参加することを決め、初めてサポーターを体験した。それまでは、訓練や研修の時間は自室で勉強したり、参加している他の兄弟たちと遊んでいた。「実際やってみると毎年兄の付き添いとして来て、遊んでばかりだった今までに比べると、初めてのことで忙しくて大変でした」という。初日は、何を手伝ったらよいのか分からず、「つまらないな」と思っていたが、二日目からは少しずつ手助けが出来るようになり楽しくなっている。言語障害のあるTnとのコミュニケーションに困っていたが、TrがTnに接する様子や訓練の場面を見ているうちに、Tnの仕草や好き嫌いが分かるようになり、Tnの気持ちを推し測れるようになっていく。また、そうしたやり取りが楽しくなっている。今回のように一時間中訓練場面に集中して参加したのは初めてのことで、班の人や兄を見ていると、普段と違ってTrとの訓練に真剣に向き合い、他のTnも頑張っている姿に感動している。同じ班のTnが、訓練が上手くいったときは嬉しくなり、達成したらさらに皆で喜び合った。動作法でのやり取りの凄さに感心し、訓練の遣り甲斐を感じたという。上手く話せないTnとのコミュニケーションの難しさと工夫の必要性を感じながら、それでも一緒に乗り切ったという充実感を得られたことに感謝している。

家庭では兄と関わることを避けていて話すことは勿論、一緒に出掛けたり一緒に居ることすらも友達や他人に見られたくないと思っていた。しかし「兄がいなかったら障がいのある人と深くかかわることも、動作法を知ることもなかったのも、今は感謝している。・・・このキャンプに来て普通の人にはできない経験、体験をさせてもらい、兄や兄のような人々に対する考えや見方が変わった気がします。・・・この気持ちを忘れずに兄ともかかわっていきたい」と記している。

IV. 考察

障害児者の兄弟姉妹と一言で纏めることは論外であるが、論述してきた療育キャンプという限られた時・空間の中で、役割としての共通体験を図ることは比較的容易である。必要に迫られて依頼していた役割を、むしろ当の障害児者の兄弟姉妹が積極的に活用することにより、その役割を通して自身の能動性や兄弟姉妹観・障害児者観を自覚していく過程は人により個人差はあるにしても、役割の属性からは、役に立つ体験、有難がられる体験、自ら手助けする体験、同じ障害児者の兄弟姉妹であるという仲間意識を持つ体験、等の自己効力感体験はし易い。

事例からは、それらが自身の今までの兄弟姉妹感から脱して同じ人間としての視線を障害児者の兄弟姉妹や他の障害児者に向けてることが出来るという相互性を持った視野が期待されることを示唆している。また、兄弟姉妹および親に対するアンケート結果からも、障害児者の兄弟姉妹が療育キャンプでの一定の役割を持つことの意義を見出すことが出来る。つまり、これは本動作法療育キャンプでの第4の目的に成り得ることを示唆している。

1. 役割としての共通体験

カウンセリングの形態にピア・カウンセリング（樋口, 1999³⁾；横須賀, 1999¹³⁾）がある。最近では、障害児者の親のペアレント・トレーニングの一環としてピア・カウンセリングを用いた研究（東村, 2006²⁾；中根, 2000⁷⁾）も報告されている。障害児者の親の会の機能の一つにこれを挙げることは出来るし、また相互支援の観点を親の会の第一義としている会も多い。兄弟姉妹よりも親のケアが当初から俎上に挙がっていた経緯からも首肯できる。

障害児者の兄弟姉妹に焦点を当てたピア・カウンセリング（吉川, 2001¹⁴⁾）を実施してきたところもあるが、相談活動の一環で兄弟姉妹の相談を設定していた謂わば受動型であり、積極的に療育活動の中に位置づけているところは少ない。本事例からもわかるとおり、兄弟姉妹が療育の場に付き添いで参加し、時間帯によっては他の兄弟姉妹たちと交流を図ったり、一緒に遊ぶ場は以前からも設定されていて、そのことを楽しみにしている兄弟姉妹もいた。ただ、その場はあくまでも自由意志での友達作りの範疇を出ることはなく、付き添い者としての兄弟姉妹の域の中での彼らの限られた行動であった。

結果のように、一定の役割を付与されて行動する中で、他の兄弟姉妹との協力・協同や意思の疎通は、単なる一緒に遊ぶ体験とは異なり、同じ役割を与えられた者同士という仲間意識は生じやすい。しかも自身の立場は、共に障害児者の兄弟姉妹であるという前提が、本音で言い合える関係を支持している。また、寝食を共に過ごすという共通体験からは、与えられた役割をこなすことも、同じ兄弟姉妹同士という気兼ねの無さも手伝って、心理的な負担は軽減されている。

風呂場での手伝い、トイレ介助、配膳の手伝い、摂食の手伝い、移動の介助、集団療法での役割分担等々、すべて自身の意思で行うことであり、介助を通して障害児者支援の困難さや難しさ、出来た時の達成感や充実感を共通体験として共有している。こうした体験は、単に役割であること以上に自己効力感を高め、キャンプでの自身の居場所感を確保し、付き添い者であるという自身の脇役感を払拭して、自分もキャンプの紛れもない構成員であるという自尊感情を醸成している。

風呂介助が終わった後の時間帯で、「サブ Tr 研修」が行われる。大学生や兄弟姉妹のサブ Tr だけを対象にして、指導者である一名の SV がミニ研修に当たる。ここでは、その日の反省会だけではなく、Tr や Tn のサポーターとしての技量を身に着けていくための動作法の技法研修も兼ねている。サブ Tr 同士が相互にロールプレイングを行ったり、援助の仕方を共有することで、兄弟姉妹同士の正にピア・カウンセリングが行われている。ことばでのやり取りという抽象的なことではなく、具体的な「からだ」を通じた援助の仕方を相互に感じ取り合いながら、手加減や援助の強弱がもたらす感じ方を、身をもって学習し合っていく場となっている。キャンプ中、わずか5回だけではあるが、ピア・カウンセリング

以上の連帯感を作り出している。

2. 兄弟姉妹観・障害児者観の変容

キャンプ中での兄弟姉妹が、同じサポーター役を担うことの意義は共通体験だけに留まらず、他の班で訓練を行っている自身の兄弟姉妹を時々垣間見たり、さらには親がどの様に自分や自分の兄弟姉妹を見ているかも観察している。同様に親や自身の兄弟姉妹にも同様なことがいえる。このことがキャンプのダイナミズムでもある。事例1・2でも共通する変容は、まず自身の障害のある兄や弟への見方の変化を指摘できる。「嫌だった」「かわりたくなかった」「一緒にいるところを人に見られたくなかった」という否定的な気持ちが、双方ともに関わりに対して肯定的となり、さらに他の障害児者への見方も前向きになっている。事例のみならず、キャンプ中の他のサポーターにも表情の変化や言動、および関わり方の同様な変容を見てとれる。また、親のアンケートからも同じことがうかがえる。

さらに、「弟のような人たちの訓練のお手伝いをしながら、大切な事を知ることができる動作法やこのキャンプは、僕にとって今もこれからも大切な場所が変わらない・・・」とか「兄や兄のような人たちに対する考え方が変わった気がし・・・この気持ちを忘れずに兄ともかかわっていきたい」と、肯定的な気持ちに汎化している。自身の障害のある弟や兄への気持ちと、他の障害児者への気持ちの変容の相乗関係は、どちらが先かは兄弟姉妹の体験過程によって異なることは予測されるが、いずれにしても双方への影響が出てくることは確かだといえる。

3. キャンプという構造的な検討

動作法キャンプは、先述したとおり、その参加者はTn、Tnの親や兄弟姉妹、Tr、サブTr、SVおよびスタッフという役割で構成されている。中心となる関係はTnとTrの一对一の訓練関係であり、その関係にSVや親も加わる。従前は、兄弟姉妹は単なる障害児者と親の付き添い者であった。

班構成をとるため、上記の「親-Tn-Tr」関係が4~5組揃って一つの班を構成する。その班にSV一名とサブTrが一名または二名加わる。本論で記述された兄弟姉妹は、この中のサブTrとして自分の家族以外の班に配置される。その班の全体を統括し、訓練指導は勿論のこと、それぞれの関係の中で生起する様々な事柄に具体的なスーパービジョンを与えていくSVがいる。サブTrに対してもSVが最終的な責任をとる。このような班が4~5班集まって全体を構成している。

また、親は全体や班ごとに掃除や洗濯及び食事の配膳などに当たり、研修の時間には親とSVで研修したり、班ごとに班のSVから訓練の進捗状況の説明を受けたり、個別の相談にも応じている。訓練場面を見学する時間も設定されており、最終日の訓練の親指導と合わせて、家庭訓練に向けた指導がなされる。さらに、親だけの話し合いの場も設けられ、ここでは先の親同士のピア・カウンセリングが功を奏している。取り分け親研修で、若いお母さんの悩みをベテランのお母さんが自身の通ってきた道として話される場面は、若いお母さん方には大きな支えとなっている。

したがって、自分の家族が属する班とは別の班になったサポーターは、配属された班のTn、Tr、SVや他のお母さん方とコミュニケーションをとらないことには何も進まない構造になっている。

一日の日程は、各地のキャンプによって若干の違いはあるが、本事例のキャンプでは朝食、朝の会、訓練、集団活動、訓練、昼食、昼寝（休憩）、おやつ、研修（Tr・親別）と並行してTnたちの保育、訓練、夕食、入浴、以降は親子は自由時間、入浴以降のSVやTr及びサブTrは、SVミーティング、班別ミーティング、全体ミーティングと続き、終了は午後10時に設定されている。

全体の流れを支える係の分担もSV・Tr・サブTrに割り振られ、TrとサブTrは兼任で生活指導係と集団活動係及びタイムキーパーをする。洗濯や配膳は親の会に任される。こうした係分担がキャンプ生活全体をカバーしている。

このような構造を作り上げてきた背景には、先述した①Tnの訓練効果、②Trの訓練技量の向上、③親の訓練技量の向上および親同士の親睦、という三つ巴の療育キャンプの目的が必然的に形成されていった経緯がある。これに加えて、従来は脇役であった障害児者の付き添い者である兄弟姉妹にキャンプでの役割を位置づけたことは、参加者全員に良好な影響を与えていることは結果のとおりである。サポーター役を引き受けた中学生がキャンプでの役割を受け入れ、それを通して自身の成長に寄与し、さらにTnやTr、大学生のサブTr、一緒に役割を担った他の兄弟姉妹とのそれぞれの関係が肯定的に増えている。

本論では、Tn、Tr および親の変容に関しては割愛したが、参加者それぞれがキャンプでの有機的な関係を作っていく過程で、主目的である障害児者の動作改善、行動変容に焦点を合わせながら、自身の役割を通してそれぞれが変容をしている。組上に挙げた中学生のサポーターも例外ではなく、様々な関係を結びながら中学生同士のピア関係に留まらず、担当した班の Tn・Tr・SV 及び大学生サブ Tr や関わった Tn の親とも連携をとっている。こうした有機的な関係を結ばなくては進んでいかないキャンプの構造やキャンプ全体のダイナミズムが、テーマである中学生サポーターの変容を押し上げたといえる。

※本論は、2016 年日本リハビリテーション心理学会において「療育キャンプでの障害児者の兄弟姉妹に関する検討—サポーターの役割を通じた兄弟姉妹の変容—」と題して研究発表したものに加筆修正したものである。発表会場にて、貴重なご示唆をいただいた鶴光代先生（東京福祉大学）に謝意を表します。

注・文献

注 1) 動作療法療育キャンプ：文中の「キャンプ」はすべて動作法によるキャンプを指す。全国各地で行われているが、正式には日本リハビリテーション心理学会資格認定委員会のキャンプ認定を受けたものを指す。名称も「心理リハビリテーション」「動作法による訓練キャンプ」「療育キャンプ」「動作法」「臨床動作法」「動作学習」「訓練キャンプ」等様々な呼称で呼ばれており、日程も7日間をベースにはいるが、それよりも短期のキャンプもある。

- 1) 林隆 (2008)：支援者の支援, 発達障害研究, 30(1), 30-38.
- 2) 東村知子 (2006)：障害をもつ子どもの親によるピア・サポート, ジャーナル集団力学, 23, 68-80.
- 3) 樋口恵子 (1999)：自立生活センターとピア・カウンセリング, 全国自立生活センター協議会「ピア・カウンセリングってなあに?」, 6-7.
- 4) 喜島大 (2014)：訓練キャンプにサブトレーナーとして参加して, 東海北陸心理リハビリテーション研究会会報, 32, 20-22.
- 5) 永田悠・古賀靖之・平川忠敏・一門恵子 (2016)：自閉症児のきょうだい親に臨む心理的サポートに関する一考察—親による心理的サポートときょうだいの生活充実感の関連—, 西九州大学子ども学部紀要, 7, 1-10.
- 6) 中垣里穂 (2015)：動作法キャンプにサブトレーナーとして参加して, 東海北陸心理リハビリテーション研究会会報, 33, 15.
- 7) 中根成寿 (2000)：「障害をもつ子の親」という視座—家族支援はいかにして成立するか—, 立命館産業社会論集, 38(1), 69-80.
- 8) 大瀧玲子 (2012)：発達障害児・者のきょうだいに関する研究の外観—きょうだいが担う役割の取得に注目して—, 東京大学大学院教育学研究科紀要, 51, 235-243.
- 9) 武田瑞穂・熊谷恵子 (2015)：自閉症スペクトラム障害のある児童とそのきょうだい関係—行動問題と知的障害の有無の影響—, 特殊教育学研究, 53(2), 77-87.
- 10) 竜野航宇・山中冴子 (2016)：障害児のきょうだい及び支援に関する先行研究の到達点, 埼玉大学紀要教育学部, 65(2), 81-89.
- 11) Harris, L. S. (1994)：Siblings of children with autism. Woodbine house, 遠矢浩一 (訳) (2003)：自閉症児の「きょうだい」のために—お母さんへのアドバイス—, ナカニシヤ出版, 京都, vii-ix.
- 12) 柳澤亜希子 (2007)：障害児・者のきょうだいが抱える諸問題と支援のあり方, 特殊教育学研究, 45(1), 13-23.
- 13) 横須賀俊司 (1999) ピア・カウンセリングについて考える, 北野誠一他編「障害者の機会平等と自立生活」明石書房, 177.
- 14) 吉川かおり (2001) 障害児者の「きょうだい」が持つ当事者性—セルフヘルプ・グループの意義—, 東洋大学社会学部紀要, 39(3), 105-116.